

## 関連性理論による子どものことば（発話・会話）の分析（その3）

下道 省三\*

The analysis of child words (utterances・conversation) by relevance theory (3)

Shozo SHIMOMICHI\*

### 1. 問題

この一連の小論は子どものコミュニケーションはどのようなか、あるいは子どもにおける伝えあい、やり取り（の様相）はどのようなかを明らかにしようとしたものである。

子どものことばを見ていると、これまでにない見方、分析が新たに見つかることがある。たとえば晶文社の『こどものことば』<sup>(1)</sup>の発言例（2500個の子どものことば）や神戸市長田区公立保育所編の『かたつむりがはだかんぼや』<sup>(2)</sup>の発言例をこれまで何回となく見ているし、私のこれまでの論文でもたくさん引用してコメント・分析を行なっているが、これまでとは違った視点からそれらのことばを分析（理解）できることがある。またたとえばピアジェの「かみつれ」の発言にも新たな解釈を加えることができる。言語や認知についての知見（たとえば関連性理論<sup>(3)</sup>や心の理論など）の学びを続けることがそれを可能にしているといえよう。

要するに子どもの会話というものは大人のそれと比べるといろいろな面で未熟であるが、具体的にどのような面で未熟であるのかを分析する視点が重要であるということになる。

この小論（研究）を「言語学的語用論」と「哲学的語用論」<sup>(4)</sup>に分けるとすれば後者のほうに近い。一方、今井は「関連性理論は合理論に基づく経験科学」であって、「関連性理論だけが『意味とその解釈』という認知作用を窺い知る『窓』を持って」おり、「経験論的解釈主義」と対立するものであるとしている<sup>(5)</sup>。となるとこの小論は関連性理論の恩恵を受けた研究であるから経験科学ということになる。ただし経験科学と言っても実験やデータを重んじた実証的研究ではない。<sup>(6)</sup> いずれにしてもこの小論の性格はこのような二分法では分類できないであろう。

さて前回の「関連性理論による子どものことば（発話・会話）の分析（その2）」（本紀要第27号）では、関連性理論に基づいてわれわれの言語使用や発話理解の分析を行ないながら、子どもとの会話の際にまわりの大人が子どもにとって関連性のある発言をどの程度行なっているのかということについて発言例を基に検討した。関連性のある発言（認知効果があつてかわかりやすい発話）は、より話の発展する（弾む）発言ということでもあるから、子どもとの会話において大人は関連性のある発言（認知効果があつてわかりやすい（コストのかからない）発言）をすることが望ましい。

\* 本学教授

しかし大人にとって子どもに関連性のある発言をするということは容易なことではない。まず認知効果という点であるが、子どもがどのように認知するか、あるいはどのように推論できるかを予想することは聞き手が大人である場合と比べると難しいはずである。子どもがどのような意味に受け取るか、どのように情報処理をするかが大人にはわかりにくいからである。また、同様に子どもが発話理解（情報処理）をする際のコスト（負担するコスト）がどのようかもわかりにくい。大人は子どもにわかりやすいように理解の際のコストを下げてやらなければならないのであるが、子どもの認知のはたらきの未熟さや背景の知識の少なさは、認知（情報処理）自体の成立を妨げることにもなる。

子どものことば（発言）のどういうところを見ようとするのかであるが、今回は子どもの発話や会話自体について、関連性の観点から、大人とどのような質的な違いがあるかを問題にしたい。関連性理論によって大人の発話理解や会話を理解し、大人の行なっていることを子どもがどの程度行なっているのかを理解しようとするわけである。われわれ大人の発話理解やコミュニケーション（伝達）活動の特徴（能力、はたらき）と比較して、子どもの発話を見るということになる。会話において大人がやれていること（想定、推論、意図理解、前提理解、表示（表象）、メタ表示、関連性の原則、グライスの協調性の原理など）を子どもがどの程度行なっているのかを問題にする。

すなわち話題に沿って話す、相手が理解できることを話す（相手の納得（理解）について考えて言う）、相手にとって役に立つ情報を話す、推論がはたらいて含みを理解する、などということ子どもが行っているかどうかを問題にする。

また当然であるが今回もやり取りに注目することになる。言語使用のユニークさや巧みさ、子どもなりの文法、使われたことばの意味や概念といったことにはあまり目を向けない。やり取りにおける（伝えあいの）ズレや不十分さ、相手の考えについての理解（推論過程）、意図の伝えあいなどといったことに注目して発言を見ていく。たとえば次のような発言例（前掲の『こどものことば』及び『かたつむりがはだかんぼや』より引用）に注目することになる。

[発言例1] おとこ3さい

子どもがわがママをいうので「お母さんは、はるくんになりたい」というと

はるくんは ゲゲゲのきたろうになりたい  
〈筆者のコメント〉母親の発言のほんとうの意味がはるくんにはわからなかった。

[発言例2]

お家で お母さんに叱られました

子ども「ママ それ ホントおこり？」

母「……………」（4歳8か月・男児）

〈筆者のコメント〉「うそこ」と「ほんと」がわかっている。また相手の考えについての考えも見られるし、ことばによって伝わるものは何かということを考えさせる。

子どものことばを分析する視点であるが、次の(1)から(5)の視点が考えられる。ただし、(1)、(2)、(3)の3つは明確に分けられるものではなく、互いに深く関係している。今回はこの5つのうち(1)～(4)について子どものことばを分析する。

- (1) 子どもは関連性のある発言をしているかどうか。
- (2) 子どものメタ表示(表象)能力はどの程度か。
- (3) 含み表現を理解できるかどうか。
- (4) ことばだけでもって意味が分かる（意味理解をしている）かどうか。（子どもにおける

ことばの内化の問題)

(5) 子どもは発話における意図明示性をどの程度理解しているか。

## 2. 関連性理論に関して

関連性理論では「すべての意図明示的伝達行為はその行為が関連性を見込みを生み出すという（伝達）原則」と「人間の認知は関連性が最大になるようにできているという一般的な（認知）原則」<sup>(7)</sup>の2つがあるが、後者は重要な情報（認知効果が高い情報）でしかも気がつきやすい（コストの掛からない）ものにわれわれは気づくということである。

前回の「その2」で、「『止まれ』が左側にある」の例<sup>(8)</sup>をあげて関連性理論について説明した。この例はわれわれの認知の例である。われわれのまわりの環境にはいたるところに情報があり、われわれはその時に必要な情報を探す。（「止まれ」の例では、この道が一方通行なのかどうかを知りたいという必要性があった。）「止まれ」は関連性があったから、すなわち認知効果とわかりやすさがあったから、有効な（必要な、役に立つ）情報として取り入れられたのである。われわれは役に立つ情報を捉えることができるのである。<sup>(9)</sup>

まわりの事象が意味をもつということの例をもう1つあげたい。朝の通勤電車で次の駅は塚口（終点の駅）だろうか稲野（塚口のひとつ手前の駅）だろうかと思った時に、対向電車とすれ違ったので次は塚口であるとわかった。塚口の手前で対向電車とすれ違うということを私は知っている。対向電車とすれ違ったということが、関連性のある情報（事象）ということになる。

この「止まれ」の例を会話として考えてみよう。すなわち話し手が聞き手よりも先にそのこと（「止まれ」が左側にあること）に気がついて、

聞き手にその情報を伝えようとして発言するという場合を考えてみよう。

話し手A「この道は一方通行だろうか？」

話し手B「『止まれ』が左側にあるぞ」

話し手A「そうか。この道は一方通行ではないな。」

まず話し手Bが「止まれ」に気づいたのは、それが関連性のある情報だったからである。その新しい情報は既存の知識体系に照らし合わせることによって「一方通行ではない」という新しい判断（理解）をもたらす情報なのである。子どもはこの「止まれ」のようなものに気づくのかどうか。（認知原則は子どもにも備わっているものなのかどうか。）

会話では話し手は関連性がある情報（役に立って（認知効果があつて）しかもあなたが理解できる情報）だとして（認知して）発言する。聞き手は役に立って（認知効果があつて）しかも私が理解できる情報を話し手が言ってくれていると思って聞く。

すなわち発話というのは、役に立つあるいは関連した情報を、（自分もわかったのだから）相手もわかるだろうと判断しながら、相手に知らせようと（気づかせようと）するというものである。認知効果とわかりやすさがそこにはルールとしてはたらいっている。

ところで会話の場合2人が同じ事に気がついていて自分もそう言うだろうということを相手が出しているということも多い。また相手の言うことは自分の予想通りのことであることも多い。上であげた例は相手の言うことは新しい情報であつて、聞き手はその情報によって自分がすでに持っている情報（知識）と合わせることによって意味のある有意義な情報（知識、認知、理解）が得られるという場合である。

### 3. 子どものことばの分析

1. で示した(1)～(4)までのそれぞれの項目について発言例をあげて分析をする。(発言例は『こどものことば』及び『かたつむりがはだかんぼや』より引用)

(1) 子どもは関連性のある発言をしているかどうか。

子どもの発話は聞き手に対して、意味のある情報を提供しているか(相手に為になることを情報として言っているかどうか)、かつ聞き手にわかるように言っているか。これは子どもにも「関連性の原則」(意味がありかつ情報としてとらえやすいものに目が行くという認知原則と、発話理解の際に関連性の見込み(保証)を持つという伝達原則)が見られるかどうかという問題である。

認知原則は人のシステムであるとも考えられるから、子どもにもあるだろう。ただし認知の際に古い情報(目の前の新しい情報を関連づけることになる既存の情報)が不足している。一方、伝達原則については、子どもの発話は、関連性を見込みをもっているものなのかという問題になる。この問題は、グライスの「協調性の原理」や「会話の格率(会話のルール)」を子どもが実行しているかどうかという問題に類似している。

[発言例3] こどもたち5さい・4さい・2さい

♠ たすくは 5さいだよーだ

♣ まあちゃんは 4さいだよーだ

♣ やしちは なんさいだよーだ

〈筆者のコメント〉この2歳の子(やしち)は年長者のまねをしているが、自分のことばが相手にどう受け取られるかわかっていない。もちろん関連性のない発言である。

[発言例4]

子どもA「ぼくの家 カタツムリいるねんで」

子どもB「私の家 かぶと虫おるねん」

子どもC「私のお風呂 なめくじいるねん」

(4歳4か月・男児 4歳5か月・女児 4歳8か月・女児)

〈筆者のコメント〉この子どもたちは会話がよくできており、Cの発言は大人なら笑いのオチ(ボケ)としてよくできた発言である。ただしグライスの「関連性の格率」からは外れた発言である。

子どもが関連性のある発言をすることができるかどうかは、次の(2)のメタ表示を子どもができるかどうかということと関係している。

(2) 子どものメタ表示(表象)能力はどの程度か。

これは子どもの発話におけるメタ表示性の問題である。「D. スペルベルは日常会話が驚くべき複雑さのメタ表示からなっていることを強調している。」<sup>(10)</sup> 大人の会話は、情報を伝達する、相手に推論させる、意図が伝わる、メタ表示を伴うなどたいへん複雑なものであろう。では子どもの会話において、このような複雑さがどの程度見られるであろうか。相手の認知についての理解や自分(あるいは他者)の表示(表象)についての表示、すなわちメタ表示が可能であればジョークやユーモアや皮肉を理解できることになる。(ジョークをジョークとして受け取ってもらえることになる。)小学生がドッジボールなどで「ちゃかし」や「けなし」、「ふざけ」、「ひやかし」などをしながらやっている。これはメタ表示ができていることを示すと思うが、5、6歳ぐらいの子はそれができるであろうか。

このように会話においては他者の表示representation(表象)を表示する能力が重要なはたらきをしている。この能力は「心の理論」の成立と関係しているであろうから、一つの仮説であるが、4歳以降の子どもの発言にはその

ことが見て取れるであろう。表示の仕方の発達  
的变化を考慮して子どもの発言を見ていくこと  
になる。これは要するに他者の考えについて理  
解できるかどうかを問題にしている。

[発言例5] おとこ2さい

——— いうことをきかずに争っていたとき

——— こうなったらおかあちゃんにも、考えがあ  
るからね。

やしちにも ハンバーガーあるよ

〈筆者のコメント〉「おかあちゃんにも、考えが  
あるからね」ということばがわかるのはいつ頃  
であろうか。

[発言例6] おとこ8さい

——— マルコメ（まるぼうず）にしたら、きつと、  
かわいいよ。

じぶんの こどもだからじゃないの？

〈筆者のコメント〉お母さんの考えを考えてい  
る。メタ性があると言えよう。

[発言例7]

給食のとき自分たちの机に椅子をもってきて

子ども「先生 椅子ひとつあいとうからここで  
お弁当食べたら？」

保母「そうね」 ……しばらくして

子ども「うまいこといった成功や」

小さな声で言っているのが聞こえました

（4歳8か月・女兒）

〈筆者のコメント〉この子は意図を隠すことが  
できる。メタ表示がみられる。

[発言例8]

なぜなぞあそびで

保母「パンはパンでも食べられないパンは？」

子ども「わかった 腐ったパンや」

保母「ちょっと違う」

子ども「じゃ かびのはえたパンや」

答えはフライパンでした…

（4歳児クラス）

〈筆者のコメント〉このなぞなぞに答えるのは  
かなり難しいだろう。普通のパンから離れない  
といけない。この年齢の子どもには適さない課  
題ということになる。

[発言例9] おんな5さい

——— ほら、ウワサをすれば影とやらよ。向こう  
から来たわよ。

——— ほんと、ウフフフ……

ウワサって なあに？ みんなでいじめるの？

——— ちがうの。みんなでお話すること。

フ～ン みんなでわるくちいうんだ。

〈筆者のコメント〉この子は実際の使用の方を  
信じている。大人から「みんなでお話すること  
」と言われても、それはことばだけのことだ  
とわかっている。（ほんとのところは別であると  
推論している。）

[発言例10] こどもたち7さい

昼間、友だちが家にきて

♠ ねえ あのひと だあれ？

♣ おとうさん

♠ で ほんとうの おとうさんは どこにい  
ってるの？

〈筆者のコメント〉この発言例も相手の考えに  
ついて考えていると言えよう。

メタ性というのは、「仮に〇〇だとしたら」  
と考えることができることでもある。このよう  
なメタ表示の能力は次の含み表現の理解と関係  
している。

(3) 含み表現を理解できるかどうか。

子どもは含み表現を理解したり使用したりす  
ることができるのであろうか。相手の発言の言  
外の意味を理解できるであろうか。遠まわしな  
言い方をしている発言例を『こどものことば』  
の2500個のことばの中に（とくに6、7歳以上  
の子どもの発言の中に）探したが、そのような  
表現は見あたらなかった。ただその中でも次の

発言例はいくらか含み的なこと（ことばではっきりと表わしていないこと）の理解が芽生えていると言えるのではないか。

[発言例11] おとこ5さい

芝刈りのとき、道具を使いたくて

ボクが それで きりたい

—あっちゃんももっとお兄さんになったら、これを使って、お母さんの手伝いでね。

ああ そのころになると おかあさんは としよりに なっちゃうから？

〈筆者のコメント〉この子は母親の説明がわかる。まわりで言っていることの意味がわかってくる年齢であろう。理由ということがわかっている、あるいは理由について考えることができる。言外の意味がわかってきつつあるのか。

(4) ことばだけでもって意味が分かる（意味理解をしている）かどうか。（子どもにおけることばの内化の問題）

子どものことばを見ていると当然ではあるが年齢によってことばが変わってくる。たとえば8歳5カ月の子がカテゴリー的（概念的）に語を使ったとか、2歳児クラスの子が動作や見かけに対して語を使っているとかを見てとれる。しかし私自身まだまだ年齢によることばの違いを十分に見て取れるとはいえない。ただ単に年齢が進むにつれて語彙が増えるとか、言い方を学習するとかの変化ではなく、より構造的、より質的な変化を捉えられないであろうか。<sup>(11)</sup> 発言からその年齢の子どものことばの特徴を見て取りたいわけである。

[発言例12] おんな3さい

迎える時間ギリギリに保育園に来た父

—はるちゃんがおこると思ったから、いそいで来たからね。

はるちゃんは おこらないの わるいことするだけなの そしたら おとうさんが おこるの

〈筆者のコメント〉子どもがことばの使い方に厳密になる気持ちは理解できる。それだけ真剣に「言語の国の市民権を獲得」<sup>(12)</sup> しようとしているということであろう。この子の「おこる」は狭い意味で（すなわち父のある種の行動に対して）使われている。「はるちゃんがおこる」というふうに「おこる」を使うのは間違っているとやっているわけである。もちろん「おこる」は一般的な意味を持つことばであるから、父（あるいは一般の人）の使い方は正しい使い方である。

次の発言例は「秋」や「はる」ということばの発言例を年少から年長へと並べてみたものであるが、何か特徴が見て取れるであろうか。

[発言例13]

園庭で赤いはっぱを見つけて

「先生 ほら秋やで！」（3歳8か月・女兒）

[発言例14]

枯葉がおちるのを見て

「秋やなあ」（3歳7か月・女兒）

[発言例15] こどもたち3さい

♣ ミカせんせい こっちきて これ

—なに？

♣ つくしだよ つくし

—ほんとう！ つくしに似ているねえ。

♡ はるだよ これ はる

[発言例16] こどもたち6さい

♣ あっ だんごむし みつけた

♠ もうすこしで はるだから とうみんさせておけばいいよ

♣ ちがうよ もうはるだよ

〈筆者のコメント〉「はる」や「あき」は園でよく使われることばであるが、本来の（われわれ大人が使う）意味を理解するのは難しいであろう。3歳児ぐらいまではことばを象徴的に（あるいは見かけやイメージで）理解し使用すると

いうことであろうか。

[発言例17]

「竹の子は たけの子ども きのは木の子どもや!!」(4歳2か月・男児)

〈筆者のコメント〉「子ども」ということばを概念的に使用するようになってきたということか。

[発言例18]

勤労感謝の話をした時

「そんなら体のなかで動いているきかきも休まなあかんやんかー」

「しんぞー(心臓)や いー(胃)やあるやんかー!!」(5歳6か月・男児)

〈筆者のコメント〉からだの中の臓器のことが言える。

[発言例19]

保母が壁面装飾した朝顔の花を見て

「おーい にせものの朝顔ができとうゾー！」

(5歳10か月・女児)

これらのことばを見ていると年齢が進むに従って語彙が多くなるし、言っている内容もよりしっかりとしてくることがわかる。2歳ぐらいまでの子どものことばは、掛け合いみたいなものなのではないかと思える。

また3歳頃の子どものことばには、連想しての表現や象徴的な表現が多いと思う。

[発言例20]

髪の毛を紫色に染めたおばあちゃんを見つけた。

「ぶどうを食べ過ぎちゃったんだねえ…」

(3歳・男児)

〈筆者のコメント〉5歳、6歳ではこういうことを言うであろうか。ちなみに年齢を伏せておいて子どもの発言を並べた時に、何歳頃の子どもの発言なのかを当てることができるであろうか。

ここではこれ以上この問題には言及しないが、子どものことばの分析を進めることによって、年齢によることば(発話)の質的な特徴を明確に捉えられるようになるであろう。

概念すなわちカテゴリーとして語が使われるのは児童期以降であるから、語の概念性というようなことは幼児期のことばの分析にはあまり役立たない。園原は『子どもの心と発達』<sup>(13)</sup>の中で、ルリアの「やれ、やれ実験(バブル押し実験)」を引用して、「ことばの意味にあわせて動作をコントロールするというように意味的な内容を持つのは、だいたい5歳ぐらいになるという実験がなされています。意味的な効果を持つてくるとは言語的には内化してきたことをさしています。」と書いている。この問題すなわち語だけによる意味理解が行なわれているかどうか、すなわち語の意味が内化されているかどうか重要な視点である。

#### 4. おわりに

子どもとのコミュニケーションについて我々は今のところ十分な研究をしていないのではないだろうか。子どもたちと関わる中で子どもとのコミュニケーションの力を経験的に身に付けたという人は少なくないであろうが、いわゆる学問的にそのプロセスを分析して、知見として提示したという研究がないように私は思う。(寡聞なため自信はないが。)

私は子どものことばの研究にも関連性理論が役に立つのではないかと考えてこの一連の研究を行なっている。関連性理論が注目するのはコミュニケーションにおける意図や推測や含みといった面である。

一般に発話理解やコミュニケーションでは、ことばが単にコード的に(記号的に)解読されて伝わるだけではなく、ことばでは表わせない

気持ちや意図が伝わっている。ただしそのようなものはわざと表わさないことも多いし、表わすことがうまくできなかったという場合も多い。聞き手は発話者（話し手）には発話者の気持ち（意図）があるというふうに思っている。発話を受けた人は、ふつうは意図（意味）を予測する。いわゆる言外の意味（たとえば非難の気持ち）を読み取るようになっている。発話は働きかけであり、意図の証拠となっている。そして発話理解は、意図の認識が大きく関わっている。

意図理解は子どもにもある。

[発言例21] おとこ4さい

かいじゅうというのは おうちがきれいなんだよ  
おとうさんしてる？

—ほんとかい？

うん そうだよ だっておうちをこわしちゃう  
だろ ほく テレビでみたもん

〈筆者のコメント〉この子はいじゅうの意図を理解できた。

このような意図理解ではなく発話理解における意図理解を子どもがどのように行っているのかを今後の検討課題としたい。

ところで人が誰かに話しかける際には、わかりあいたいという欲求、同調を求める欲求、あるいは伝えあいたいという気持ちがはたらいていると私は考える。たとえば、朝の通勤電車で、ほとんどの人は黙って乗っているが、人々の間ではかなりの程度のコミュニケーション（暗黙のやり取り）が行われていると言えよう。それはまわりの人のしぐさや表情を認知（とくに共感）しているということである。人々がまわりの人のしぐさや服装へのチェックをしているということでもある。人々はそれによって安心を得られているという面があるだろう。一般に人と関わる際には共感が生じると言えよう。相手

の考えや表象についての共感、同調、理解が失われると不安になるのであって、それが人見知りやカルチャーショックの原因であると言えよう。

[注]

- (1) ぐる一歩・エルソル編『こどものことば』晶文社1987年
- (2) 神戸市長田区公立保育所編『かたつむりがはだかんぼや』1989年
- (3) D. スペルベル・D. ウィルソン（内田聖二ほか訳）『関連性理論－伝達と認知－（第2版）』研究社、1999年
- (4) 加藤広重「語用論の来し方とそのゆくえ」月刊言語2009年12月号、32ページ
- (5) 今井邦彦「経験科学はどこへ？」月刊言語2009年12月号、82ページ
- (6) 発達心理学なども科学的研究であろうとして、実験やデータを重んじているが、数学的、統計学的分析の苦手な人はそれへの劣等コンプレックスから、またそれが得意な人は自分の適性の発揮からそのような研究法を志向するというのはいすぎであろうか。
- (7) 注2の356ページ
- (8) 下道省三「関連性理論による子どものことば（発話・会話）の分析（その2）」、甲子園短期大学紀要第27号、2009年3月、44ページ。要約すると次のような例である。「通勤でいつも歩いているそんなに広くない道を歩いているときに、この道が一方通行なのかどうか気になった。（前からも車が来るのだろうか。）その数秒後に、前の方の地面に「止まれ」があるのが見えた。その「止まれ」が真ん中ではなく左側にあったので「一方通行ではない」ということがわか

った。」

(9) 朝日新聞の1面の最下段には書籍広告が載っていて、普段私はこの欄にはあまり注意していないのであるが、ある日のその欄にあった保育士という活字にはすぐに気がついた。見なれた文字であるから認知のコストがかからないと同時に、自分にとって重要な文字でもあったからではないか。重要か重要でないかの判断がどのように行なわれるのかを明確に説明できないが、まわりの多くの情報の中から知覚のどこかの段階で選別が行なわれて重要な情報に気づくと考えてよいのではないか。

(10) N. スミス (今井邦彦訳)『ことばから心を見る』岩波書店、2003年、85ページ

(11) 1歳児、2歳児……というようにそれぞれの年齢の言語使用について理解する際に、問題にするのは語彙の変化であるとか、一語文、二語文とか、助詞の使い方であるとかそういうような表面的な変化ではない。そのような変化を明らかにしてもそれははたして捉えた(心理言語学的に捉えた)ことになるのかどうか。言語使用において、子どもがどのような心理的・精神的な活動を行なっているのかが重要である。これは捉えようとする変化の徴表を何にするのかという問題である。私は、どういうことができるようになっていくのか、あるいは認知、思考、言語使用といった心理的・精神的な活動において何をやっているのかという点での変化を問題にしたい。

(12) 岡本夏木『子どもとことば』岩波書店、1982年、2ページ

(13) 園原太郎『子どもの心と発達』岩波書店、1979年、27ページ

